

第二章 人口

第一節 江戸時代の人口

わが国では江戸時代以前は全人口を調査した例はないようであるが、江戸時代にはいと人口を知するための資料として宗門改帳、宗門人別一紙証文、宗旨人別帳、村明細帳などがある。これらのうち宗門改、宗門人別、宗旨人別は本来人口調査のために行われたものではなく、江戸時代初期以来キリシタン教徒の探索のためにつくられたものである。江戸幕府はキリシタンの禁止を強化するため踏み絵や訴人などの手段を用いたが、寛永十四年（一六三七）の島原の乱後、鎖国を断行するとともに寛永十七年から檀那寺へキリスト教徒でないことを証明してもらうため、その名前と出生地、生年月日を届け出るようになった。届け出は家主から寺院、庄屋の承認を得て役所に差し出された。こうしてできた書類が宗門改帳である。村明細帳には、その村の総石高、田畑石高、反別、家数、人数、牛馬教などが記されている。

本村にのこされている資料をあげると次のようである。

○ 寛延二年巳三月（一七四九）

村明細帳

家数 百九拾八軒

第二章 人口

惣人数 九百貳拾三人

内 男 四百八拾人

女 四百貳拾壹人

僧貳人

(渡辺泰一家所蔵文書)

(注)人数が合わないので女四百四十一人の誤りか

○ 享和三亥年三月 (一八〇三)

家人別惣改帳

甲州都留郡成沢村

高六拾五石八斗四升九合

外ニ除地高三斗八升参合 寺持

都合高六拾六石貳斗三升二合

一、家数 貳百三拾八軒

外ニ寺壹ヶ寺 馬八拾疋

牛 無 之

一、総人数 九百七拾貳人

内 男 四百九拾貳人

女 四百七拾九人

○ 安政三年辰二月 (一八五六)

宗門人別帳

家数 百九拾四軒

口数 八百五拾壹人

山伏 壹人

外ニ 僧貳人

(渡辺常雄氏所藏文書)

内 男 四百七人

女 四百四拾四人

馬 九拾疋

(渡辺泰一家所藏文書)

○ 文久三年亥三月 (一八六三)

家数人別惣改帳 成沢村

村高六拾五石八斗四升九合

外ニ除地高三斗八升三合

一、家数 貳百軒

去戌年家数

外寺 壹ヶ寺

一、家数 百九拾九軒

当亥年壹軒減

第二章 人口

一、去戌年人別 八百六拾六人

内 名主貳軒

外 寺壹ヶ寺 僧壹人、山伏壹人

内 男 四百拾人

女 四百五拾六人

一、当亥年人別 八百五拾人

内 男 四百貳人

女 四百四拾八人

内人別 貳拾人 男 九人 去戌年出生人之分

女 拾壹人

内人別 三拾七人 男 拾六人 去戌年死失人之分

女 貳拾壹人

内人別 女三人 去戌年入人之分

内人別 三人 男 貳人 去戌年出人之分

女 壹人

差引人別 拾六人 男 八人 減

女 八人

なお『甲斐国志』（文化三年一八〇六）村里部には次のように記している。

（渡辺泰一家所蔵文書）

成沢村 大田和

一、高六十五石八斗四升九合

戸二百三十八

口九百七十二 男四百八十二 馬八十
女四百九十

これを表に示すと次のようである。

年	代	戸数	人口	男	女	その他
寛延二年	(一七四九)	一九八	九二三	四八〇	四四一	僧二人
享和三年	(一八〇三)	二三八	九七二	四九二	四七九	山伏一人、僧二人
文化三年	(一八〇六)	二三八	九七二	四八二	四九〇	
安政三年	(一八五六)	一九四	八五一	四〇七	四四四	
文久三年	(一八六三)	一九九	八五〇	四〇二	四四八	

一般に江戸期における人口の変化は江戸前期から中期までは増加傾向を示し、後半期は減退あるいは停滞傾向を示しているが、前者は新田開発等による人口増加で、後者は天明や天保の大飢饉などが影響していると思われる。この村の傾向は一般よりややおくれいているように見え、前表によると寛延から享和まで五十四年間に四十戸、四十九人増加しており、文化三年から安政三年まで五十年間に四十四戸、百二十一人も減少している。これは天保の大飢饉などによるものと思われるが、文久三年の人口動態をみても出生者二十人に対して、死亡者三十六人と、出生者より死亡者が多く十六人の自然減をみている。

参考のため『甲斐国志』（文化三年）によって近隣村々の人口を比較してみる。

第二節 明治以降の人口の推移

一 維新後の人口調査

版籍奉還が行われて明治維新になると、明治政府は直ちに土地、物産、人口の調査に着手した。「明治三年戸籍（庚午戸籍）」が明治初年の最も古い戸籍であったが、明治四年四月太政官布告をもって戸籍法が公布され、新法による戸籍調査が実施された。これが明治五年の「壬申戸籍」であり、それには士族・平民・新平民などの身分的差別の記載があったため、戦後差別的戸籍として問題になった。

村名	石高	戸数	人口	男	女
川口村	三四七石余	二七二	一一二八	五六一	五六〇
成沢村	六五石余	二三八	九七二	四八二	四九〇
舟津村	二〇一石余	一七〇	八九七	四五〇	四四七
大石村	一九九石余	一四二	六〇一	三〇一	三〇〇
勝山村	一一四石余	一〇三	四七八	二七〇	二〇八
長浜村	三六石余	五八	三一六	一六〇	一五六
大嵐村	五六石余	四〇	一三三	六八	六五
木立村	二一八石余	一九一	一一七六	五九一	五八五

人口統計には、戸籍の台帳に基づいて算出したいわゆる「本籍人口」と、本籍人口を基にしてつくった「現住人口」の二種類がある。江戸時代から明治前半までは、人口移動が少なく本籍人口はおおよそ現住人口であったが、明治後半から大正・昭和にかけては、人口移動がげげしくなり本籍人口と現住人口の差が大きくなってきている。

人口の調査を目的とした近代的で精密な人口調査が、明治十二年十二月三十一日午前零時現在をもって、甲斐国一円に「甲斐国現在人別調」として行われた。これは大正九年第一回国勢調査が行われる以前において実施された特筆さるべき調査であった。この調査は明治十五年六月に発表されているが、このときの山梨県の人口（九郡三十六町二百八十四村）は総人員三十九万七千四百十六人（男十九万七千六百十三 女十九万九千八百三十三）で、そのうち「住地ニ居ル者」三十九万三千三百五十五人に「他国ヨリ入寄留」の者一千九十八を加えた三十九万四千四百五十三人が現住人口であった。今日の県人口の半分に満たなかった。

政府は種々の事情で延引していた第一回国勢調査を大正九年（一九二〇）十月一日午前零時現在で全国一斉に実施した。大正九年以後十年ごとに「本調査」その中間五年ごとに「簡易調査」が行われ、その結果は内閣統計局から報告書として刊行されている。国勢調査はすでに大正九年、十四年、昭和五年、十年、十五年、二十年、二十五年、三十年、三十五年、四十年、四十五年、五十年、五十五年、六十年と十四回にわたって実施されている。

国勢調査は十月一日現在であるが、それ以前の県統計書による人口統計は各年とも十二月三十一日現在となっている。

二 本村における人口推移

年 度	戸 数	総 人 口	男	女
明治三三	二〇九	一、二九〇	六三四	六五六
三四	二二〇	一、三三〇	六四二	六七八

第二章 人口

江戸末期文久三年（一八六三）の百九十九戸、人口八百五十人に比し、明治三十三年は二百九戸、千二百九十人であるので、三十七年間に十戸、四百四十人の増である。これを一戸当たり人口で算すると文久三年は一世帯四・三人弱、明治三十三年は六・三人弱である。江戸期は生活の苦しい農村が人減らししていたのに比し、明治期に入ってから産も向上して一世帯当たりの人口が増加していることがわかる。この傾向は大正・昭和とつづいて大正二年には一世帯六・八五人、大正十年に六・五三人、昭和四年に六・五二人である。

昭和	年	戸	総人口	男	女
〃	一五	三〇六	一、九一四	九一七	九六七
〃	一〇	三七一	二、〇二一	九九一	一、〇三〇

昭和	〃	〃	〃	〃	〃	〃	大正	〃	〃	〃	〃	〃	〃
四	一四	一〇	九	八	六	五	二	四	四	三	三	三	三
二九八		二八二	二八〇	二六二	二四三	二四四	二三四	二三二	二二八	二二四	二二六	二二四	二二四
一、九四三	一、八六五	一、八四三	一、八一二	一、八〇五	一、七七六	一、七三八	一、六〇六	一、五七一	一、四九九	一、三八一	一、三七三	一、三九〇	一、三九〇
九四三	八九八	九三三	九一六	九一五	九〇六	八八八	八一二	七八九	七五四	六九七	六六一	六八三	六八三
一、〇〇〇	九六七	九一〇	八九六	八九〇	八七〇	八五〇	七九四	七八二	七四五	六八四	七一二	七〇七	七〇七

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
一五	二〇	二五	三〇	三五	四〇	四五	五〇	五五	六〇
三八二	不明	四二四	四二三	四三二	四四三	四四二	五三一	六一七	六五九
二、〇九六	二、三五四	二、三一六	二、二四四	二、三一六	二、二三四	二、〇九七	二、一八八	二、二八三	二、四五五
一、〇〇四	一、〇九七	一、〇八七	一、〇六二	一、一七二	一、一二八	一、〇〇八	一、〇七二	一、一一二	一、二五一
一、〇九二	一、二五七	一、二二九	一、一八二	一、一四四	一、一六六	一、〇八九	一、一一六	一、一七一	一、二〇四

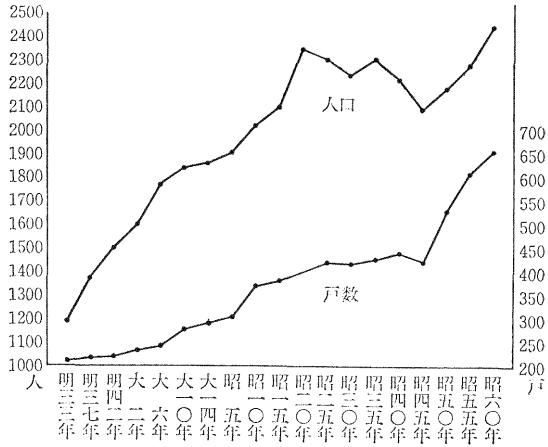
昭和六十年は明治三十三年に比し、戸数で三・一五倍、人口で一・九〇倍増加し、昭和五年に比し、戸数で二・一五倍、人口で一・二八倍増加し、昭和三十年に比し戸数で一・五六倍、人口で一・〇九倍増加している。また一世帯当たりの人口は昭和十五年がピークで五・四九人、それから漸減して昭和五十年には四・一二二人、六十年には三・七二人となって核家族化の傾向が顕著である。

総人口は、終戦による帰還兵、引き揚げ者などにより一時増加したが、その後やや減少した。しかしベビーブームによって三十年代は高い水準にあった。四十年代に入ると、日本経済の高度成長によって人口の都市集中が顕著となり、山間へき地には過疎化現象がおこり、鳴沢村でも人口流出して、戸数も人口も非常に減少した。五十年代に入って富士北麓高原の地の利を利用した高原野菜の栽培や観光開発が行われて村の活性化がはかられ、人口が急速に増加していった。さらに核家族化も加わって世帯数の増加が著しい。鳴沢村の長期計画によると昭和七十年には人口二千七百四十人と推計している。

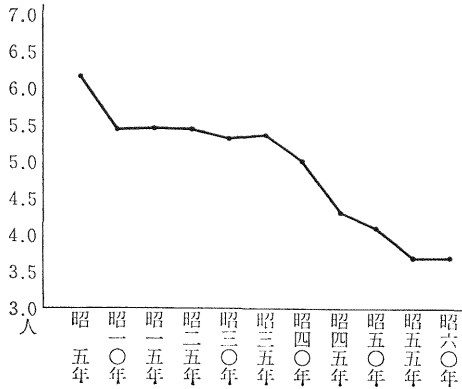
第三節 人口構成

鳴沢村の昭和六十年、男女別人口構成は、男子一千二百五十一人に対し、女子は一千二百四人で男子が多い。しかし六十歳以上の場合をみると、男子百九十九人（男子合計の一五・九％）に対し、女子は二百四十二人（女子合計の二〇・

鳴沢村の人口と戸数の推移



1世帯当たり人口の推移



昭和60年国勢調査鳴沢村男女別年齢別人口

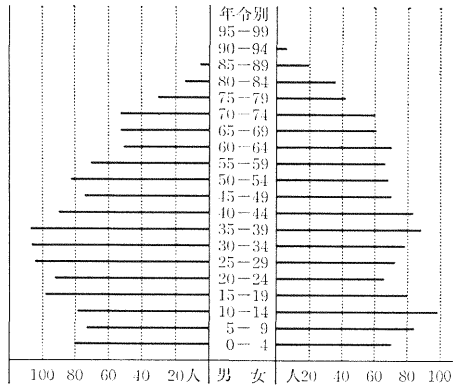
年 齢	総数	男	女	年 齢	総数	男	女	年 齢	総数	男	女
総 数	2 455	1 251	1 204	35～39歳	192	105	87	70～74歳	112	52	60
0～4歳	151	81	70	35	45	22	23	70	23	11	12
0	32	18	14	36	45	22	23	71	24	11	13
1	35	15	20	37	38	21	17	72	18	12	6
2	27	15	12	38	43	26	17	73	20	4	16
3	24	14	10	39	21	14	7	74	27	14	13
4	33	19	14	40～44歳	171	89	82	75～79歳	71	30	41
5～9歳	156	72	84	40	38	17	21	75	14	5	9
5	31	12	19	41	39	23	16	76	14	6	8
6	32	18	14	42	31	14	17	77	14	7	7
7	34	12	22	43	35	21	14	78	19	8	11
8	30	17	13	44	28	14	14	79	10	4	6
9	29	13	16	45～49歳	142	73	69	80～84歳	50	14	36
10～14歳	176	78	98	45	23	12	11	80	11	2	9
10	37	22	15	46	31	15	16	81	11	3	8
11	36	17	19	47	24	13	11	82	10	3	7
12	34	12	22	48	29	18	11	83	12	3	9
13	33	15	18	49	35	15	20	84	6	3	3
14	36	12	24	50～54歳	149	82	67	85～89歳	21	2	19
15～19歳	174	95	79	50	35	18	17	85	6	-	6
15	35	15	20	51	19	14	5	86	3	-	3
16	44	27	17	52	41	20	21	87	3	1	2
17	39	26	13	53	30	15	15	88	6	-	6
18	32	13	19	54	24	15	9	89	3	1	2
19	24	14	10	55～59歳	134	70	64	90～94歳	6	-	6
20～24歳	157	92	65	55	28	15	13	90	1	-	1
20	18	9	9	56	35	18	17	91	1	-	1
21	23	13	10	57	25	15	10	92	3	-	3
22	35	24	11	58	27	14	13	93	1	-	1
23	37	22	15	59	19	8	11	94	-	-	-
24	44	24	20	60～64歳	119	50	69				
25～29歳	180	109	71	60	22	8	14				
25	41	28	13	61	27	10	17				
26	36	23	13	62	22	10	12				
27	37	25	12	63	25	15	10				
28	37	20	17	64	23	7	16				
29	29	13	16	65～69歳	111	51	60				
30～34歳	183	106	77	65	22	10	12				
30	37	20	17	66	18	10	8				
31	31	17	14	67	27	10	17				
32	41	24	17	68	19	7	12				
33	30	18	12	69	25	14	11				
34	44	27	17								

第二章 人口

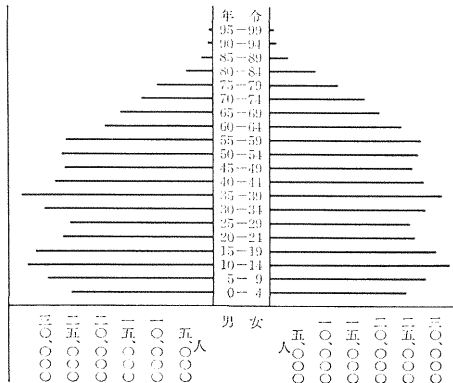
四二%)で、女子人口の四分の一は六十歳以上である。これを富士吉田市と比較すると、六十歳以上が総人口に占める割合は一二・八%(男〇・一〇七%、女〇・二四九%)で、鳴沢村の高齢者が多いことがわかる。山梨県も富士吉田市も六十歳以上の各段階で順次少なくなっているが、鳴沢村では、六十〜六十四、六十五〜六十九、七十〜七十四の三段階で余り変化がなく、七十五歳以上になると急に男子が少なくなり、男子四十六人に対して女子百二人で二、二倍となる。

鳴沢村の年齢構成も「ひょうたん型」で、十四歳以下の幼児、児童数が低く、四十、五十歳代と匹敵する。そのなかで五〜九歳、十〜十四歳代の女子が男子より多く、特に十〜十四歳の女子は著しく多い。二十歳代末から三十歳代

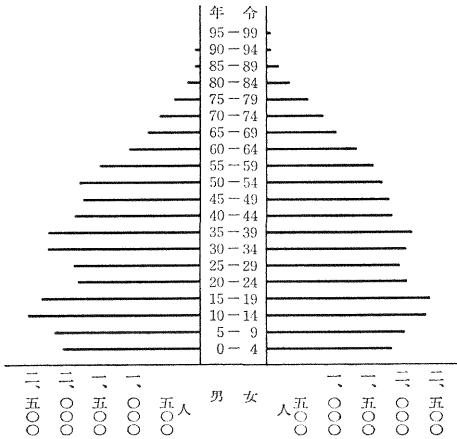
昭和60年男女別年齢構成 (国勢調査)



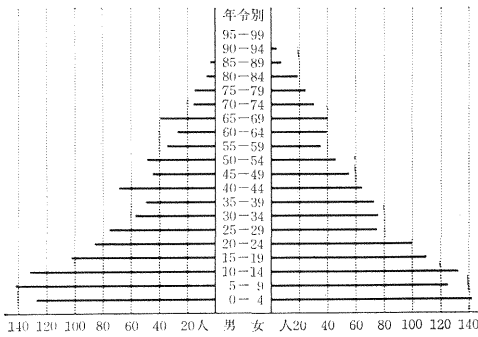
昭和60年山梨県男女別年齢構成 (国勢調査)



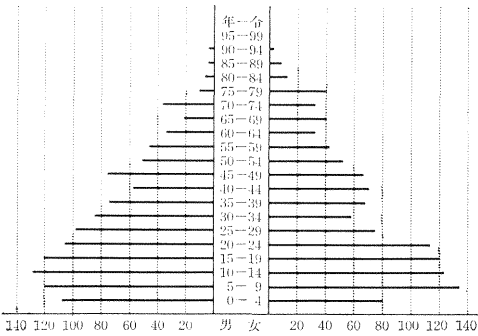
昭和60年富士吉田市男女別年齢構成（国勢調査）



昭和30年鳴沢村男女別年齢構成（国勢調査）



昭和35年鳴沢村男女別年齢構成（国勢調査）



が特に突出しているのは戦後のベビーブームが、この年代まで上がってきたからである。これを山梨県全体や富士吉田市と比較すると、同じ「ひょうたん型」であるが幼児・児童数が低く、三十歳代末から四十歳そのなかで鳴沢村の場合、五十五年は十五・十九、二十・二十四歳代が非常に低く、若年男子の他出が原因と思われるが、この人たちが六十年の調査で二十・二十四、二十五・二十九歳となるわけであるが著しく多くなっている。

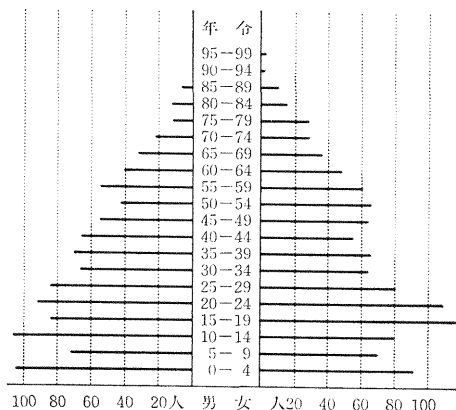
鳴沢村における人口構成の推移をみると、昭和三十五年は全体として、戦前と同じピラミッド型である。そのなかで戦後のベビーブームによって五歳・十歳代の幼児・児童が多いことと、三十歳・三十九歳代の男子が少ないことが

第二章 人口

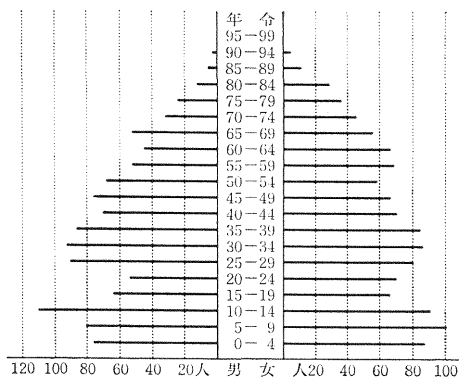
わかる。後者は戦没者が多かったためで、この年代は女子の方が多い。三十五年の人口構成では幼児数が少なくなっているが、四十五年で再び増加しているのは第二のベビーブームのためである。三十五年で低い四十〜四十五歳代は四十五年では五十〜五十九歳代に上って低い。六十歳以上の各段階における比率は時代がすすむに従って順次高くなっており、幼児の数は少なくなっている。真ん中がふくれている「ひょうたん型」である。

次に職業別人口構成を別表でみると、昭和五十五年は農業人口が三六％で、四十年の五六％に比して著しく減少している。それに比しサービス業が四十年一三・六％、五十五年二三％と、商業が四十年八・〇％、五十五年九・五％と第三次産業の職業人口が増加し、また工場誘致によって製造業も四十年九・五％から五十五年一三％と増加してい

昭和45年鳴沢村男女別年齢構成（国勢調査）



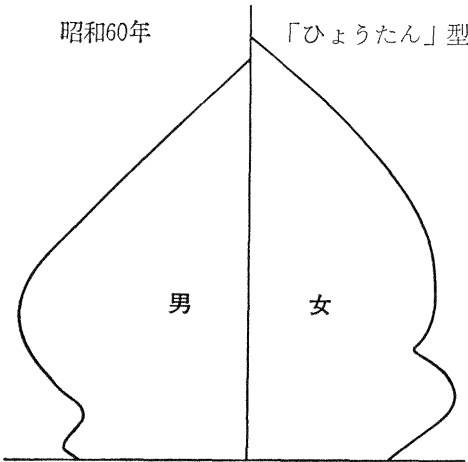
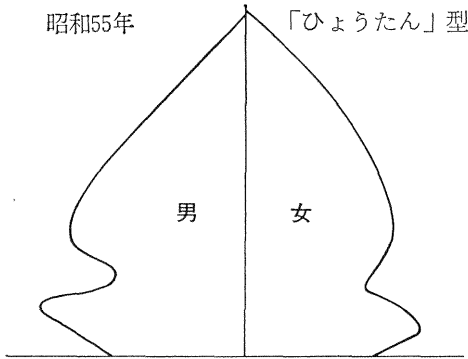
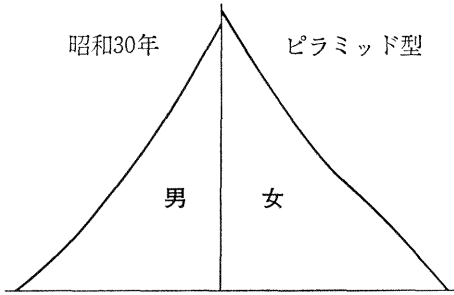
昭和55年鳴沢村男女別年齢構成（国勢調査）



る。

それが六十年になると、農業は二七・三％に低下し、第三次産業が三六・一％と増加している。製造業は二二・五％で、公共事業の増加などによる建設業の増加で、第二次産業を合計すると三五・七％に達し、第二次、第三次産業を合わせると、全体の七割強となっている。

鳴沢村の長期計画によると、昭和七十年には農林業二百八十四人（一九％）、製造業百九十七人（二三％）、第三次産業一千十四人（六八％）になるといふ。すなわち農業就業者が著しく減少し、第二次産業の比率はほぼ横ばい、第三次産業の就業者が著しく増加して行くことになるという予測である。このようにして、次の人口動態で述べるように、

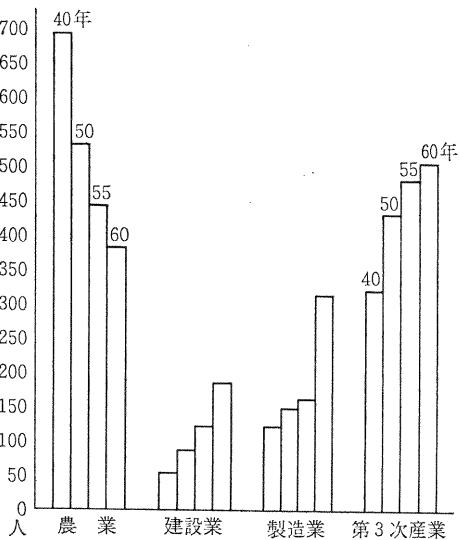


第二章 人口

職業別人口

		第1次産業		第2次産業			第3次産業					
		農業	林業・狩猟業	鉱業	建設業	製造業	卸売業	小売業	金融・保険業	不動産業	運輸・通信業	電気・ガス業
昭和40	男	282	23	14	50	79	50	7	21	91	19	
	女	408	13	0	3	40	42	2	3	77	9	
昭和50	男	250	7	10	74	86	66	11	15	106	29	
	女	282	5	0	12	57	69	10	3	114	7	
昭和55	男	209	13	2	109	95	62	12	24	133	27	
	女	234	4	0	15	65	55	8	5	151	8	
昭和60	男	188	9	2	156	203	84	10	24	142	33	
	女	195	5		29	112	57	9	7	129	11	

職業別人口の推移



転入者の増加で着実に人口が増加しているが、兼業農家の増加とともに、都市型の混住社会になりつつある。

第四節 人口動態

一 明治・大正・昭和前期の人口動態

次の表は明治・大正・昭和前期における出生、死亡を比較したものである。

年次	出生			死亡		
	男	女	計	男	女	計
明治34	13	21	34	18	12	30
〃 39	18	13	31	13	20	33
〃 44	32	40	72	13	25	38
大正 5	31	37	68	16	14	30
〃 10	36	31	67	23	16	39
昭和 5	26	31	57	20	9	29
〃 10	36	33	69	13	14	27
〃 15	40	33	73	13	9	22
〃 20	32	27	59	29	15	44
〃 25	38	34	72	20	16	36

明治三十四年は出生三十四人に対し、死亡三十人、明治三十九年は出生三十一人に対し、死亡三十三人でほとんど同数である。明治三十四年は人口一千三百二十人に比し出生は二・五%、死亡は二・二%で、昭和六十年の出生三十四人、死亡十七人、人口二千四百五十五人に対する比率出生一・三%、死亡〇・六%に比べると、出生において約二倍、死亡において三・七倍である。出生率も死亡率も高かったことがわかる。

国の発展と国民生活の向上にともなつて、明治末期から大正にかけて出生率も高くなり、人口比三・五%前後となつたが、死亡者数は多くなつていないので人口の自然増が多くなるのである。特に昭和十五年は戦時中の産めよ増やせよで、出生者数七十三人の最高となつてゐる。昭和二十年の死亡者数の多いのは、戦争の激化と生活環境の悪化、戦死者によるものと思われ、二十五年に出生者数の多いのは戦後のベビーブームによるものがある。

二 昭和後期の人口動態

(イ) 自然的動態

第二章 人口

年次	転入			転出		
	男	女	計	男	女	計
昭和30	23	24	47	46	43	89
〃 35	12	13	25	31	35	66
〃 40	43	34	77	98	62	160
〃 45	44	54	98	57	69	126
〃 48	45	46	91	39	42	81
〃 49	28	29	57	44	41	85
〃 50	34	30	64	44	37	81
〃 51	36	30	66	36	28	64
〃 52	31	36	67	34	41	75
〃 53	33	37	70	34	51	85
〃 54	27	33	60	30	28	58
〃 55	48	70	118	34	48	82
〃 56	34	37	71	31	26	57
〃 57	33	42	75	43	35	78
〃 58	59	57	116	39	47	86
〃 59	71	62	133	27	44	71
〃 60	81	48	129	51	47	98

年次	出生			死亡		
	男	女	計	男	女	計
昭和30	27	34	61	14	10	24
〃 35	31	20	51	8	19	27
〃 40	16	14	30	16	8	24
〃 45	15	17	32	10	7	17
〃 48	19	24	43	10	8	18
〃 49	20	16	36	14	10	24
〃 50	13	15	28	4	10	14
〃 51	17	13	30	11	11	22
〃 52	15	17	32	7	6	13
〃 53	16	18	34	12	5	17
〃 54	13	14	27	10	3	13
〃 55	18	17	35	10	11	21
〃 56	19	10	29	14	15	29
〃 57	11	15	25	11	2	13
〃 58	14	16	30	7	13	20
〃 59	15	19	34	7	12	19
〃 60	17	17	34	9	8	17

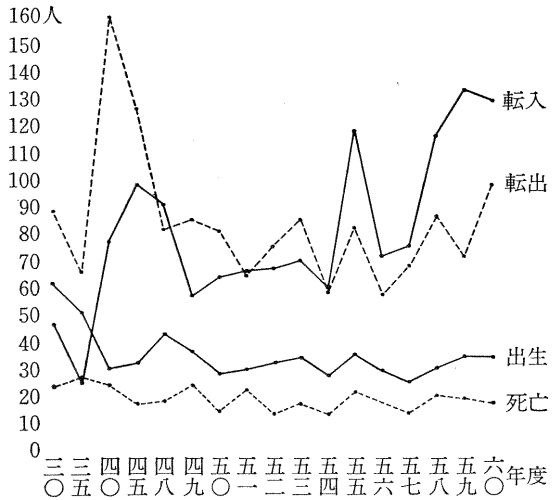
三十五年度までは出生率がまだ高く、三十年の人口二千二百四十四人に対し六十一人で、二・七％（二世帯比一四・四％）であったが、四十年代から出生数が低下して、昭和四十年には人口二千二百二十四人に対して出生三十人で一・三％（二世帯比六・七％）で半減している。昭和六十年は人口二千四百五十五人に対し、出生三十四人で一・三％（二世帯比五・一％）であつて、四十年以降今日までほぼ同じ状態である。

死亡は昭和三十年二十四人で、人口比一・〇％で、五十年は十四人で人口比〇・六％、六十年は十七人で人口比〇・六％、いずれも低い水準で高齢化が進んで、出生率が低いにもかかわらず人口の自然増はつづいている。

(四) 社会的動態

社会的人口減は昭和五十年までつづき、特に昭和四十年は転入七十七人に対して、転出百六十人で八十三人減である。これは日本経済の高度成長にとり

鳴沢村人口動態推移



なう都市志向型の人口流出で、過疎化現象が四十年前後に顕著である。その後漸次人口流出は減少して、昭和五十五年以降は転入増に転じて、過疎化現象に歯止めがかかった。転出に比し転入増は五十五年三十六人、五十六年十四人、五十七年七人、五十八年三十八人、五十九年六十二人、六十年三十一人である。これは日電アネルバなどの工場誘致や、観光施設・観光産業の発達に負うところが大きい。こうして自然増とあいまって昭和六十年の人口二千四百五十五人と、過去最高の記録となったのである。

(清水 小太郎)